

英語圏文学システム論の一前史——B. クラークの構成主義的文学観

The Circumstances Leading up to a Literary Systems Study in the English-speaking World: B. Clarke's Constructivist View of Literature

大井 奈美*
Nami OHI

はじめに

従来、文学をめぐるのは、文献学的研究だけでなく、構造主義的、認知心理学的、そして認知言語学的研究なども実践されてきた。つまり、文学について考察するにあたって、作家や作品そのものに注目するばかりではなく、文学をいかに認知するのかという点にも関心が向けられてきたのである。さらにまた、文学がいかなる技法で創作され受容されるか、などの課題とは異なり、コミュニケーションという観点から、後述していくような文学の社会的性質と経験創発的性質とに目を向ける、「文学システム論」と呼ばれる研究ネットワークが存在してきた。文学システム論という呼称は、認知・存在・コミュニケーションをめぐる構成主義システム論に基本的にもとづいて文学研究を遂行するという、当該ネットワークが共有する特徴に由来している。

本稿がとりあげるのはまさにこのような研究潮流であり、それは欧米を中心に1970年代からおこなわれてきている。欧州、とくにドイツやオランダでは、ラディカル構成主義を応用し

た研究派と、ルーマンの社会システム理論を応用した研究派の二潮流が存在しており、その主要な展開についてはすでに論じられてきた¹。このうち、とりわけルーマン社会理論派の研究は、欧州とくにドイツ語圏の文学システム論のなかで、現在にいたるまで確固とした地位を築いているといつてよい²。また、英語圏でも、クラーク (B. Clarke)、グンブレヒト (H. U. Gumbrecht)、サドウスキ (P. Sadowski) らをはじめ、多数の研究者たちによる文学システム研究が展開されてきた (ラインファント (C. Reinfandt) など、英語圏の大学に所属していても、文学システム論をめぐる英語で書かれた業績を有する研究者も多い)。

具体的にいうと、これまで文学システム論がとりくんできた問題のなかには、①政治や科学など他の社会現象との交流のなかでいかに文学が形作られて発展してきたのか、また、②個別の創作者や受容者が、世界や自分自身を経験する仕方 (これは世界や自分のあり方でもある) を、文学がいかに創出し実現しているのか、な

*東京大学大学院情報学環

キーワード: B. クラーク、科学主義、寓話、変容 (メタモルフォーゼ)、文学システム研究、構成主義システム理論、ネオ・サイバネティクス

どが含まれている。

しかし、このような共通関心にもかかわらず、また、文学システム論分野では欧州と英語圏の両方で活躍する研究者も散見されるものの、残念ながら、両者の創造的な研究交流がそれほど盛んであるとは言えない現状がある。さらに、そもそも日本では、豊かな研究上の蓄積を有する英語圏の文学システム論については、ほとんど紹介されてきていないといつてよい。

したがって、英語圏の文学システム論について、その特徴・課題・意義がどこにあるのかを考察し、またそれを日本の読者に知らせる準備とするために、本稿の目的は、英語圏文学システム論の代表的研究者である前述のクラークに注目し、クラークによる文学システム論実践の前史に

あたる文学研究について、理論面から概観することである。クラークは、テキサス工科大学英語学部で文学と科学について教鞭をとっており、「文学・科学・芸術学会³」の会長を2006年から2008年まで務めた人物である。

なぜクラークによる文学システム論の前史に焦点をあてるかという、クラークの文学システム論を理解するために非常に重要な思想がそこに多く含まれているからであり、逆に言えば、前史にあたる文学研究はシステム論的着想をすでに宿しているとも考えられるからにほかならない。そのため、欧州における文学システム論と比較する観点を適宜導入しながら、議論をすすめることにしたい。

1. 欧州文学システム論との比較によるクラークの位置づけとその展開

文学システム論一般に強い影響を及ぼしてきたものの一つは、ルーマン (N. Luhmann) による、社会システム理論を土台にした芸術論である⁴。あえて概略的にまとめるならば、その一連の著作や論文は、おもに、①：芸術作品を社会的なコミュニケーション・プロセスとして捉える観点、②：①の基本的着想にもとづき、実際に分析をおこなう際に芸術のスタイルに注目する観点、という二つの点において、文学システム論に受容されていったと考えられるだろう。

進化論的着想にも影響を受けながら、おもに②の観点をとりいれたのが、ドイツのルーマン社会理論派の文学システム論であり、それはすでに述べたように現在にいたるまで隆盛をつづけてきた⁵。一方で、おもに①の着想をとりいれ

て発展してきたのが、英語圏文学システム論、とりわけクラークの研究である。したがって、おおまかに言えば、ドイツでは、ルーマンの機能的分化社会論を遠景にしつつ、文学現象自体を通時的観点から巨視的にとらえようとする傾向が優勢なのにたいし、英語圏では、より個々の作品にもとづいた微視的な考察を展開する傾向が強くみられると言えるだろう。

ドイツにおける既存の文学システム論は、一般的に、個々の作品そのものに注目するというよりむしろ、社会現象あるいはコミュニケーションとしての文学の特質をあきらかにしようとする傾向を有していたため、文学テキストに内在的な経験的考察をおこないにくく、その点が批判されてきた。とはいえもちろん、個別的には、ハンブルク

大学のシュヴァーニッツ (D. Schwanitz) のように、システム論の観点から直接作品を分析する研究もある。しかし、それ自体はなかなか興味深い面を有する研究であるにもかかわらず、文学テキストを説明する道具のようにしてシステム論の概念を作品分析にそのまま導入することで、非常に難解な印象を研究の受容者に与えてしまい、その結果、彼の研究による貢献が文学システム論のなかにそれほどおおきな影響を及ぼしてきたとはいえない⁶。テキストをめぐる以上のような課題が、欧州の文学システム論を相対的に停滞させる一因となったのである。

英語圏のクラークの研究は、この課題にたいする一つの現実解を提案するものとして位置づけることが可能だろう⁷。クラークの議論は、他の社会現象との関係のなかで文学を歴史的にとらえる視点のみならず、個々の作品に内在的にせまって詳説する視点をもあわせもっている。重要なのは、一見すると、シュヴァーニッツの研究のように、文学を成り立たせているメカニズムを構成主義システム論という「道具立て」によってあきらかにしようとしているかのようにとらえられかねないクラークによる作品分析が、実は逆に、あたらしい秩序や現実性の構成・創発の事例として、つまり、いわば、人間が自分や世界を経験する仕方の直接的な提示として、文学作品をとらえる点だと言えよう⁸。これについては、次節であらためて論じたい。

クラークが文学研究で一貫して注目してきた、後述するような科学と文化とを交流させる表象（とりわけ寓話）が、しだいに構成・創発というテーマに接続していき、それらがシステム論にとって核心的な課題だったからこそ、ク

ラークはシステム論に接近していったのである。クラークの研究で文学の機構をシステム論の術語によって明示化する方向性がとられるのは、あくまでこうした土台にたつたうえのことだった。それは、当然ながら、システム論の概念枠組を具体化してあらわすための手段に文学を還元するのでは全くなく、むしろ、人間や社会（世界）にたいする「観察」実践としてそれらのあり方を提示し、観察行為という経験をつうじてそれらを構成していくものとしての文学の意義を、あらためて確認することだと言ってよいだろう。

このような、構成主義的文学観と呼べるものに徐々に接続していくクラークの主要な関心が、はじめから文学における変容（メタモルフォーゼ metamorphosis）とその寓話に向いていたのは、したがってきわめて自然なことだった。クラークは、初期の著作である『著述の寓話——変容の主体⁹』において、すでに、西洋における文学的変容の伝統を、寓話理論に深く関係づけて論じていたのである。変容へ注目する理由は、変容が、社会や世界をあたらしく経験する際の行為者のあり方、つまりあたらしい（存在）秩序の創発であるからであり、さらに付言するならば、それはすなわち構成主義システム論の主要テーマにほかならない。

変容は、現代のポストモダン情報社会においては、「ポストヒューマン」というかたちでも文学の主題となっており、それはたとえばメディア論などをはじめとする学問分野でも注目されてきた¹⁰。その理由は、変容をめぐる寓話が何らかの対象の表象ではなく、それ自体で直接、構成＝創発というシステムのあり方を

具現・実現するもの (embodiment) なのだという点に、多くの人が直観的に気づいているからなのだろう。(変容の) 寓話が有するこの意義を、本稿では強調しておきたい。

とはいえ、クラークが寓話へ注目する意味についてほりさげるのは次節におくり、本節では、いわばそうした着想の基礎を用意した、自然科学との密接な交流関係において文学・芸術を考察するクラークの研究を概観しておこう。そのもっとも代表的な成果は『エネルギーの表現形式——古典的熱力学の時代における寓話と科学¹¹⁾』と、続編的位置づけの編著『エネルギーから情報へ——科学と技術、芸術、そして文学における表象¹²⁾』にまとめられている。

そこでとりあげられるのは、古典熱力学・電磁気学から相対性理論・量子論にいたるまでの甚大な科学的インパクトを背景とした、19世紀後半から20世紀前半の西洋を中心とする作家、作品、文学・芸術潮流であり、したがって目下の分析の焦点になるのは「エネルギー」である。具体的には、もともと哲学的用語であったエネルギーが、当時の科学に受容され、科学におけるエネルギーの表現形式がさらに文学・芸術に受容されることで、いかなる作品や芸術潮流が生じ、モダニズム／ポストモダニズム芸術をかたちづくることになっていくのが、テキストに即した豊富な実証的分析とともに論じられていく。

2. 表象概念の拡張——構成主義的文学観へ

クラークによれば、「熱力学的科学主義」は、「可逆性・予測可能性・決定性」を典型と

その際、文学・芸術における科学の影響をあらわす用語として、クラークは「科学主義 (scientism)」を採用した¹³⁾。科学主義には、科学的手法や概念を科学以外の分野に不適当に応用するという否定的含意が付与されてきたところがあるが、クラークはそのような含意に気づきつつも、あえて科学主義という言葉の中立的なかたちで用いている。「(古典) 熱力学的科学主義」と「生物学的科学主義 (生氣論)」が議論をすすめるうえでの中心になるが、それらを架橋する位置づけにあるのが、「電気生氣論 (electrovitalism)¹⁴⁾」とクラークが名付ける様式 (mode) であり、これらはそれぞれ、エネルギーのおおよその表現傾向をあらわしているといつてよい。クラークに即してより正確に経緯を説明すれば、古典物理学から現代物理学にいたる過程で、熱力学的科学主義にたいして、「観念的 (visionary) 科学主義」とクラークが呼ぶ、神学と科学との宇宙論的観点における折衷の様式が登場するが、その科学的表象は物理学のなかで確たる居場所をみつけられなかったために、観念的科学主義は生物学的科学主義にとってかわられたのである。こうした、熱力学的科学主義をはじめとする各種の科学主義をめぐる関係性やその内実が具体的にはどういうことなのか、熱力学的／生物学的な両科学主義にとくに注目しながら、次節でくわしく論じたい。

する秩序を基本的に重視する古典物理学の影響を、その背景として有しつづけている形式であ

る。しかし、巨視的現象の不可逆性を示す熱力学第二法則や、空間内の散逸的エネルギー形態を示唆する電磁気学の影響のもとで、力学的思想自体のうちに対立・矛盾が生じるようになった。それを調停しようとする試みが、たとえば前述の「マクスウェルの魔物」として実現したような科学的表象であり、そうした科学的表象の文学・芸術分野におけるあらわれを、クラークは「観念的科学主義」と呼ぶ。

さらにクラークは、古典的熱力学がキリスト教の世界観との折衷を目指していたという背景を指摘し、その後に発展した観念的科学主義のなかにも、黙示録的終末観（キリスト教）とエントロピー増大による世界の終末（科学）という宇宙論のうえで、神学と科学が接近する様子が反映されていることについて、論じていく。実際、マクスウェルも、ニュートン流の機械論とキリスト教の神とを和解させようとする英国の熱力学者たちの一人だったのである。

具体的には、熱力学的科学主義と観念的科学主義は、初期モダニズム¹⁵の抽象芸術傾向として実現したのみならず、それらのあいだの緊張が、ヒントン（C.H. Hinton）の『ペルシアの王』（1884年）や、フラマリオン（C. Flammarion）の『世界の終末 *La Fin du Monde*』（1894年。邦訳書名は『此世は如何にして終るか』）、ウェルズ（H.G. Wells）の『タイムマシン』（1895年）など、19世紀のヴィクトリア女王時代の作家たちによる作品傾向を生みだしていく。その傾向は、とりわけ、（熱力学第二法則を反映する）現象の不可逆性が帰結するところの、終末論的着想によって性格づけられつつも、その終末で完全に終わらな

い、（熱力学第一法則を反映する）復興を描こうとする。

ただし、マクスウェルの魔物、あるいはより広く観念的科学主義が暗に示唆するような、「力学的システムの自己組織的可能性」は、当時の物理学のなかでたしかな位置づけを得られなかったため、その着想は、「生物学的科学主義」に接続していく。すなわち、観念的科学主義は生物学的科学主義にとってかわられていくことになった。

ここでいう生物学的科学主義は、「不可逆性・予測不可能性・非決定性」に典型的な、一種の混沌状態を基本的にふまえるものである。それは進化論の影響を背景に有するが、その理由は、進化論が、進化的時間の不可逆性と、進化の動因となるランダムで予測できない遺伝的逸脱を含意するからである。熱力学と進化論の出発が19世紀半ばの同時期だったために、それらが文化に及ぼす影響は当初よりからみあっていたが、すでに述べた熱力学内の緊張から生じた、エネルギー概念の後期古典的な表現様式である電気生氣論によって、エネルギー形式は、熱力学側から生氣論側へと導かれていった。

熱力学的＝実証的科学主義がいたる世界の終末、あるいは完全な知性・秩序の結果的敗北という一種絶望的な展望にたいして、いわば、それをうけとめながらも、電気生氣論をつうじて生物学的科学主義に接近していくことによって、生命や宇宙のあたらしい存在のあり方、関係の結び方を提示し、いわば終末後の復活、あるいは生命力の復権への希望を探索したのが、クラークの研究の中心にあるモダニズム作家たちの作品である¹⁶。たとえば、ロシアの作家ザミャーチ

ン (Y. Zamyatin) による『われら』 (1927年) や、ロレンス (D. H. Lawrence) の『王冠 *The Crown*』 (1915年。改訂版1925年)、『チャタレイ夫人の恋人』 (1928年) などであり、それらの作品は、熱力学的科学主義と観念的科学主義とのあいだの対立をあらわす¹⁷。

共産主義の政治体制を背景にして書かれた『われら』では、前述のウェルズが提示したような未来社会の実現、あるいは完全に予測可能な管理社会のディストピアにおいて、性的エネルギーによる心理的「復活」や革命的エネルギーによる社会的「復活」が描かれ、『チャタレイ夫人の恋人』などでは、古典熱力学的な文明社会の世界観

を批判的にとらえ、性や官能の描写をつうじて、人間・宇宙・自然のあいだの関係を再構築することが目指された。クラークによると、それらの作品はまだ秩序と混沌とのあいだの熱力学的・モダニズム的な袋小路を完全にぬけだすものではなかったものの、とくに四次元時空複合体に着目するかたちでザミャーチンやロレンスがその後相対性理論をも作品中に自然に受容していくことで、この行き詰まりにたいする解決を実践的に模索していったのである。

以上で述べた科学主義の関係の概要を図示すれば、つぎようになるだろう (筆者作成)¹⁸。

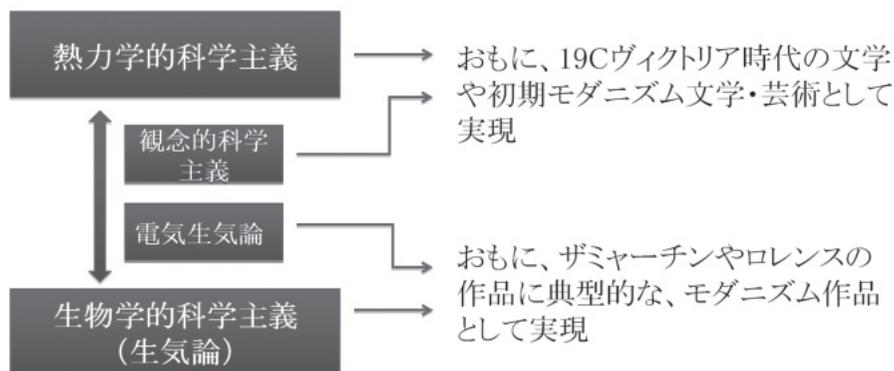


図1：科学が文学・芸術におよぼす影響の概略 (エネルギーの表現様式)

こうした、クラークを中心に展開された一連の研究の重要な意図の一つは、表象概念の根本的なとらえなおしにあった。すなわち表象は、たとえば科学的概念やデータなどを文学が発展的・創造的に受容していくような文化的活動そのもの (文化的活動の全体) として、理解されるのである¹⁹。そこでは、可視的存在の模倣を基礎とするものではなく、いわば、科学・技術と文学とのコミュニケーション・プロセス (の具現化) として、表象 = 物語、ひいては文学が

とらえられると言えるだろう。

クラークの研究に本質的な着想には、科学的表象を介したコミュニケーションとして、社会的なプロセスの観点から文学作品 = 物語を評価するという点が含まれる。この点は、すでに述べたようなルーマンの着想 (①) に通底していると考えられるだろう。その理由は、システム論的に言えば、クラークの着想を、科学システムによる一次観察にたいする、文学・芸術システムの二次観察行為としてとらえることも

でき、その文学システムを科学システムがさらに観察する…という相互観察ならびに共進化プロセスとして、表象=文化活動全体をとらえることができるからにはほかならない。この意味では、クラークらの意図する「表象概念の拡張」とは、表象を、システム論的な「観察・記述」行為として再評価することと同じであり、したがって、ここにおいて、クラークは徐々に構成主義的というべき文学・芸術観を採るようになっていったと言えるのである。

科学など他の社会コミュニケーションと文学との共進化過程について歴史的に論じるという観点は、ドイツの文学システム論と着想を共有するところがある。しかし、ドイツで主流だった、ルーマンの②の着想を活かした文学のスタイル分析にたいして、クラークの研究は、モダニズムの前衛芸術以降の文学・芸術について詳述しているという特徴があり、これはクラークら英語圏文学システム論の長所であると言えるだろう²⁰。なぜなら、モダニズム以降の文学においては、既存の文学観をそのまま前提することが難しく、また、さまざまなスタイルが混在しているため、そのような文学について、システムの意味論的機構（いわゆる成果メディアや二値コードなど）にもとづく研究観点によって詳細かつ説得的な考察をおこなうことは、必ずしも容易とはいえないからである。付言すれば、モダニズム以降の芸術にはとくに、科学と文学との相互浸透・構造的カップリングが顕著にみられる点も、クラークがそこに注目した理由であるだろう。巨視的スタイル論の、テキストそのものを容易に扱いつらいという弱点の補強とあわせて、クラークらによる実践は、より

「実行可能 viable」で経験的な文学システム論に接続していく可能性を秘めている。

さて、以上のようなクラークらによる表象概念の拡張あるいは構成主義的文学観への移行を具現する核にあるものは何だろうか。それこそ、クラークが研究活動の初期から注目し、1節でも言及した、「寓話」にほかならない。すなわち、暗喩的な表象を時間的・空間的な形態へとひらく物語体系にむすびつけること²¹によって、「プロセスとしての表象」全体を具体化・可視化するものが、寓話であると考えられるだろう。もともと、実証的（熱力学的）科学主義という文学・芸術傾向においては、「エネルギー」そのものだけではなく、「エントロピー²²」、古典物理学の秩序を支えるものとして存在が仮定された「エーテル²³」、あるいはいわゆる「ラプラスの悪魔²⁴」や「マクスウェルの魔物²⁵」なども、本来的に寓話の性質を有するものとして遇されてきた。これらの科学的表象（熱力学法則そのものも含む）において、科学と寓話とが接近し、科学的表象は、たとえば、過去・未来・宇宙への旅、地球外生命体との遺伝子レベルの交換、ジキルとハイドのような人格レベルの変化、人間から昆虫への変化・統合などの、伝統的に蓄積された寓話的装置によって、文学的・芸術的に描かれてきたのである。

このような「表象から寓話へ」というクラークの関心の移行は、「エネルギーから情報へ」という同様の移行と不可分に結びつくものと言えるだろう。実際、すでに引用したクラークの編著は、まさに『エネルギーから情報へ』というものだった。クラークらの研究範囲は、エネルギーという熱力学的領野にとどまらずに、さ

らに現代の「情報、情報学、情報技術」に注目し、情報をめぐる科学的表象が、現代の文学・芸術的实践のなかでいかに表現されるのかに関心を発展させていく。しかしここで寓話や情報への「移行」といっても、それが表象やエネルギーの存在を否定するわけではないことに注意が必要である。むしろクラークは、情報社会を背景にして、エネルギーや物質性がいかにさらなる変容 (metamorphosis) を経験していくかという点を基礎的着想として有しながら、以後の研究を進めていったと言ってよい。

ここできわめて重要なのは、クラークが情報学を基礎づける物質性 (materiality of informatics) を強調して、我々の「文化は、個体的かつ生態的な具現 = 身体化という生命的形式 (living forms) をとる必要がある」としたうえで、「エネルギーから情報への移行は、身体へと…我々をつれもどす」と論じている点である²⁶。1節でみたような先行する研究において、クラークは、科学的表象にたいする文学・芸術による「観察」すなわち寓話に注目し、そこにおける実証的 = 熱力学的科学主義から、観念的科学主義、さらには生物学的科学主義を具体的にたどったが、それはとりもなおさず、システムの自己組織的な可能性への注目を重視するクラークの意図を明確に準備し、またあらわすものにほかならない。

さらにクラークは、情報環境で不可避になってくる「仮想性」に注目し、「身体の仮想化は、…脱身体化 (disembodiment) の形式ではなく、人間の再創造・生まれ変わり・繁殖・方向付け・突然発生である²⁷」というP. レヴィの着想にもとづきながら、「身体とその変容

(metamorphosis)・創発 (emergence)」という問題系に接近していく²⁸。なぜなら、レヴィのいう人間の再創造や突然発生などは、すなわち一種の変容であり、また創発でもあるからである。

情報環境というあたらしい状況におかれた際の「身体の変容」は、環境との相互関係から生じる「ポストヒューマン」をめぐる議論へと、さらにわれわれを運んでいく。文学の領域では、そのような身体の変容が、情報をめぐる科学的表象 (科学的概念や思想など) についての文学的表象として登場するのである。もっといえば、身体的変容とは、環境や他者との相互作用というプロセス自体の寓話なのであり、寓話は、そのプロセスにおける変容 (すなわち創発) が実現したもの (embodiment) と言えるだろう。

ここにおいて、クラークは、(観察行為による) 創発とその具現に注目する構成主義システム論へ本格的関心を寄せながら文学研究を遂行する段階に到達した。クラークにしたがってシステム論に即していえば、「身体的変容はシステムの偶発性の寓話²⁹」なのであり、したがってそれは、認知や存在のあり方そのものをあらわすものなのである。ここで偶発性とは、行為者 = システムが、環境や他者の複雑性に直面したときに選びとりうる、認知や自己変容の多様な可能性を指す。本節で論じてきたような構成主義的文学観を背景にして、前述したような、認知や存在のあり方自体のあらわれとして文学をとらえる観点が自然に出現したと言えるのである。

結果として、クラークによる文学研究のつぎなる課題は、当然、それら認知や存在のメカニズムをテキストに即して実証的にあきらかに

していくことになる。クラークが示唆するように、情報化による現代社会環境の極端な複雑化に鑑みれば、その環境の複雑性に直面するわれわれの偶発的選択・あり方を具現しつづける文学について、このような観点から研究していく必要性は否定できないだろう。こうした課題に

おわりに

本稿では、英語圏文学システム論の主要な研究者の一人であるクラークに注目し、その文学システム論の前史にあたる文学研究について、理論的に概観してきた。その結果、クラークが文学研究のなかで注目する身体的変容や寓話などが、構成主義システム論そのものの中心的課題と密接な関係を結んでいることがあきらかになった。このことは、とりもなおさず、われわれ自身や社会にたいして文学が有する意義や価値をあらためて考察しあきらかにしていくことにつながるばかりでなく、非常に複雑化している現代の情報社会を生きるわれわれが世界（環境）と自己を経験する仕方、あるいは世界（環境）や自己のあり方自体を、文学研究をつうじて浮き彫りにする端緒にもなるはずである。

なお、クラークは、本稿で述べてきたような議論と直接的に関係し、それをさらに発展させるものとして、メディア研究者ハンセン (M. B. N. Hansen) とともに、「ネオ・サイバネティクス (Neocybernetics)」を提唱している³¹。それは、構成主義システム論と不可分なたちで関係している、いわゆる「セカンド・オーダー・サイバネティクス (二次サイバネティクス)」を再評価する呼称である³²。たとえば、本稿で

とりくむ研究こそが、クラークによる文学システム論なのであり、その第一の主要な成果が『ポストヒューマン・メタモルフォーゼ——物語とシステム³⁰』（2008年）としてまとめられていくこととなったのである。

も言及したラディカル構成主義やルーマンの社会理論もこのなかに含められ、おおよそ、閉鎖システムによる自己言及的な作動あるいは観察行為が、現実世界や社会現象などを構成する、という着想（観察の構成性）を共有するものと言ってよいだろう³³。

したがって、本稿で述べてきたような、クラークの文学研究やシステム論にとって非常に重要な「創発と実現＝身体化 (emergence and embodiment)」という主題は、そのまま、ネオ・サイバネティクスの中心的課題にほかならない。決定性・秩序重視の傾向を残す古典熱力学的科学主義と、非決定性・混沌を肯定的にふまえる生物学的科学主義という、寓話をめぐるおもな二つの様式とそれらの作品上の実現史にとりくみ、身体化 (embodiment) という生命的形式 (または身体 body³⁴) への注目にいたった英文学者クラークが、ネオ・サイバネティクスを提唱したのは必然的であり、クラークと関連研究者たちがおこなってきたような学際的志向を有する文学研究とネオ・サイバネティックな思想とは、当初から本源的かつ不可分な関係を結んできたということができるのである。

文学研究とシステム論、あるいはネオ・サイ

バネティクスとの緊密な連関をあきらかにしつつ、クラークをはじめとする英語圏文学システ

ム論について具体的作品分析とともに論じるこ
とが、つぎなる課題である。

謝辞

資料収集・調査に際してB. クラーク教授のご協力をいただいたことに感謝いたします。

註

- 1 つぎの論文を参照。名執基樹「オートポイエシス論は文学テキストの夢をみるか?」(2011年)、大井奈美「ネオ・サイバネティクスと文学研究」(2010年)。
- 2 近年の成果としては、たとえばつぎの論集を参照。Werber (Hg.), *Systemtheoretische Literaturwissenschaft* (2011).
- 3 Society for Literature, Science, and the Arts (cf. <http://www.litsci.org/>).
- 4 つぎを参照。Luhmann, "Ist Kunst codierbar?" (1976); "Das Kunstwerk und die Selbstreproduktion von Kunst" (1986); "Das Medium der Kunst," (1986); *Die Kunst der Gesellschaft* (1995).
- 5 これはとくに、プルンペ (G. Plumpe) やヴェルバー (N. Werber) らによる研究実践にあてはまる。欧州のルーマン流文学システム論のなかでも、とくにオランダのライデン大学におけるブランゲルらの研究のように、ルーマンによるコミュニケーション概念の応用を試みるものがあるが、残念ながらそれは、豊かに実を結んだとは言えなかった。
- 6 たとえば、つぎの論文を参照。Schwanitz, "Zeit und Geschichte im Roman - Interaktion und Gesellschaft im Drama" (1987). シュヴァーニッツには、文学システム論の着想を非常にわかりやすく紹介する、啓蒙的試みをおこなった著作 (*Systemtheorie und Literatur* (1990)) があり、英語圏でもよく読まれているが、シュヴァーニッツ自身の具体的な研究成果はむしろ、上記の論文などでくわしく論じられていると考えられるだろう。ただし、この論文の一部は邦訳されているにもかかわらず、その研究上の貢献を一読して理解することは、かならずしも容易ではない。
- 7 したがって、クラークによる英語圏の文学システム論は、ネオ・サイバネティクスの「実行可能性 viability」を実証しようという研究的努力の一実践としても評価できるものであり、実際、クラーク自身も、*Posthuman Metamorphosis* (2008年) で、その意図をあきらかにしている。
- 8 これについては、つぎの論文における分析が参考になるだろう。河本英夫「創発と現実性」(2010年)。
- 9 Clarke, *Allegories of Writing* (1995).
- 10 たとえば、つぎの著作などを参照。Hayles, *How we became posthuman* (1999).
- 11 Clarke, *Energy Forms* (2001).
- 12 Clarke and Henderson (eds.), *From Energy to Information* (2002). とりわけ、クラークとヘンダーソンによる充実した序文を参照。
- 13 以下の本文における各種の科学主義をめぐるクラークの理論上の着想には、ラトゥールの「テクノサイエンス (technoscience)」などによる影響がある。「テクノサイエンス」については、つぎの著作を参照。Latour, *Science in Action* (1987). クラークは、ラトゥールの議論をふまえた「テクノサイエンス作用 (technoscience)」という自身による造語を用い、それを、「テクノサイエンスの文学分野全体のうちに科学的言説を再配置するもの」であり、「それはさらに、現代の/ポストモダンの(中略)文化的分野の全体をつうじて、寓話の構造と手順が作用してきた/しつづけていることを、暗示する」と論じている (*Energy Forms*, p. 7, chapter 3)。
- 14 電気生気論という呼称の背景には、熱力学的科学主義のうちに、正確には、電磁気学の影響も含まれていることがある。
- 15 なお、初期モダニズムについて、クラークはつぎの書籍でくわしく論じている。*Dora Marsden and Early Modernism* (1996). ここでは、前衛文学専門誌の英国人編集者マースデンに焦点が当てられ、初期モダニズムをとりまく生気論的エネルギー状況に注目した存在として、評価されている。
- 16 文学実践におけるこうした希望は、クラークに即しておおまかに言えば、エントロピー的散逸を示唆する熱力学第二法則にたいして、全体としてのエネルギーの保存を示す熱力学第一法則の着想を敷衍させることで生まれるものと言えるだろう。
- 17 つぎを参照。Clarke, *Energy Forms*, Chapter 6.

- 18 なお、本文でも述べたように、ザミャーチンやロレンスらの作品は、熱力学的科学主義と観念的科学主義（その着想が生物学的科学主義に接続していく）との対立を実現しており、この図は、あくまでクラークの議論の概要を理解するための簡略図である。
- 19 つぎを参照。Clarke and Henderson (eds.), *From Energy to Information*.
- 20 なお、厳密にいうと、クラークは、作品だけにはなく、たとえば、ユナニズム、イマジズム、渦巻派、未来派など数多くの芸術運動自体にも言及しながら議論を展開している。
- 21 つぎを参照。Clarke and Henderson (eds.), *From Energy to Information*, introduction.
- 22 なお、情報とエントロピーについては、つぎの論文などを参照。Clarke, "From Thermodynamics to Virtuality", in *From Energy to Information*. 西垣通『デジタル・ナルシス』(1991=2008年) 第4章2節。
- 23 クラークは、次元性をめぐる寓話としてのエーテルに注目している (*Energy Forms*, 第3部)。
- 24 実証的科学主義を象徴する科学的表象、すなわち、完全な知性の寓話的な像である。
- 25 古典力学に即した秩序と、熱力学第二法則が示唆する混沌とのあいだの矛盾を説明するために、マクスウェルが仮定した科学的表象で、エネルギー保存と散逸とのあいだにまたがる知性の寓話的な像であり、熱力学内に生じた緊張を反映する。
- 26 Clarke, "From Thermodynamics to Virtuality" in *From Energy to Information*, p. 33. 引用箇所原文は、つぎのとおりである。
"[O]ur ... cultures need to make with the living forms of individual and ecological embodiment. / The transit from energy to information brings us back to the body".
- 27 Lévy, *Becoming Virtual* (1998).
- 28 つぎを参照。Clarke, "From Thermodynamics to Virtuality".
- 29 つぎを参照。Clarke, *Posthuman Metamorphosis*.
- 30 *Ibid.*
- 31 クラークは、ネオ・サイバネティクスに深く関連する学術雑誌『Cybernetics and Human Knowing』の編集委員も務めている。
- 32 つぎを参照。Clarke and Hansen, "Neocybernetic Emergence" (2009); Clarke and Hansen (eds.), *Emergence and Embodiment* (2009). なお、筆者の前掲論文は、欧州の既存の文学システム論をネオ・サイバネティクスの観点からとらえたものである（「ネオ・サイバネティクスと文学研究」）。
- 33 ネオ・サイバネティクスをめぐる日本語の文献としては、『思想』の特集（2010年）のほかに、つぎの論文などがある。西垣通「基礎情報学の射程」（2012年）。
- 34 なお、クラークは、文学における医学的テーマの比較分析という観点から、つぎの書籍をまとめている。Clarke and Aycock (eds.), *The Body and the Text* (1990).

参考文献

- Bruce Clarke, *Allegories of Writing: The Subject of Metamorphosis*, State University of New York Press, 1995.
- , *Dora Marsden and Early Modernism: Gender, Individualism, Science*, University of Michigan Press, 1996.
- , *Energy Forms: Allegory and Science in the Era of Classical Thermodynamics*, University of Michigan Press, 2001.
- , *Posthuman Metamorphosis: Narrative and Systems*, Fordham University Press, 2008.
- and W. Aycock (eds.), *The Body and the Text: Comparative Essays in Literature and Medicine*, Texas Tech University Press, 1990.
- and L. D. Henderson (eds.), *From Energy to Information: Representation in Science and Technology, Art, and Literature*, Stanford University Press, 2002.
- and M. B. N. Hansen (eds.), *Emergence and Embodiment: New Essays in Second-Order Systems Theory*, Duke University Press, 2009.
- and M. B. N. Hansen, "Neocybernetic Emergence: Retuning the Posthuman," *Cybernetics & Human Knowing*, 16:1-2, 2009, pp. 83-99.
- フラマリオン『此世は如何にして終るか——科学小説』高瀬毅訳、改造社、1923年（国立国会図書館デジタル資料として閲覧可能：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/978010>）

- Hayles, N. K. *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*, University of Chicago Press, 1999.
- ヒントン『科学的ロマンス集』ボルヘス編、宮川雅訳、国書刊行会、1990年
- 河本英夫「創発と現実性——ネオ・サイバネティクスの一回路」、『思想』1035号、岩波書店、2010年7月、76-97頁
——『メタモルフォーゼ——オートポイエーシスの核心』青土社、2002年
- Latour, B. *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society*, Harvard University Press, 1987 (= 『科学が作られているとき——人類学的考察』川崎勝、高田紀代志訳、産業図書、1999年).
- Lévy, P. *Becoming Virtual*, Basic Books, 1998.
- Lawrence, D. H. *The Crown*, in M. Herbert (ed.), *Reflections on the Death of a Porcupine and Other Essays*, Cambridge University Press, 1988.
- ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』伊藤整訳、集英社、1977年
——『ロレンス短編集』上田和夫訳、新潮文庫、1995年
- Luhmann, N. "Ist Kunst codierbar?", in S. J. Schmidt (Hg.), *Schön. Zur Diskussion eines umstrittenen Begriffs*, Fink, 1976, S. 60-95.
——, "Das Kunstwerk und die Selbstreproduktion von Kunst", in H. U. Gumbrecht und K. L. Pfeiffer (Hgg.), *Stil. Geschichten und Funktionen eines Kulturwissenschaftlichen Diskurselementes*, Suhrkamp, 1986, S. 620-672 (= 『芸術作品と芸術の自己再生産』、『自己言及性について』219-257頁).
——, "Das Medium der Kunst," in *DELFIN*, 7, 1986, S. 6-15 (= 『芸術のメディア』、『自己言及性について』258-277頁).
——, *Essays on self-reference*. Columbia University Press, 1990 (= 土方透、大澤善信訳『自己言及性について』国文社、1996年).
——, *Die Kunst der Gesellschaft*, Suhrkamp, 1995 (= 『社会の芸術』馬場靖雄訳、法政大学出版社、2004年).
- 名執基樹「オートポイエシス論は文学テキストの夢をみるか?——ドイツ文学システム論争を超えて」、『ドイツ語文化圏研究』9巻、日本独文学会北陸支部、2011年、51-91頁
- 西垣通『デジタル・ナルシス——情報科学パイオニアたちの欲望』岩波現代文庫、1991=2008年
——『基礎情報学の射程——知的革命としてのネオ・サイバネティクス』、『情報学研究』東京大学大学院情報学環紀要、83号、2012年、1-30頁
- 大井奈美「ネオ・サイバネティクスと文学研究——ラディカル構成主義派とルーマン社会理論派の射程とその拡張について」、『思想』1035号、岩波書店、2010年7月、131-147頁
『思想』1035号（「ネオ・サイバネティクスと21世紀の知」特集）、岩波書店、2010年7月
- Schwanitz, D. "Zeit und Geschichte im Roman - Interaktion und Gesellschaft im Drama: zur wechselseitigen Erhebung von Systemtheorie und Literatur", in D. Baecker u. a. (Hgg.), *Theorie als Passion*, Suhrkamp, 1987, S. 181-213 (= 『語りの自己言及性』伊藤秀一訳、『現代思想』21巻10号、青土社、1993年9月、173-185頁).
——, *Systemtheorie und Literatur*, Westdeutscher Verlag, 1990.
- ウェルズ『タイムマシン』池央耿訳、光文社古典新訳文庫、2012年
- Werber (Hg.), *Systemtheoretische Literaturwissenschaft*, de Gruyter, 2011.
- ザミャーチン『われら』川端香男里訳、岩波文庫、1992年



大井 奈美 (おおい・なみ)

【最終学歴】東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。博士（学際情報学）

【主たる論文】

「ネオ・サイバネティクスと文学研究——ラディカル構成主義派とルーマン社会理論派の射程とその拡張について」、『思想』1035号、岩波書店、2010年7月、131-147頁

「観察の自覚——俳句の近代化と国民文学性の構成主義システム論的再考」(『ユリイカ』(『現代俳句の新しい波』特集号、43(11)、青土社、2011年10月、190-199頁)

「新傾向俳句・伝統派俳句の基礎情報学的分析」(『情報文化学会誌』19(1)、2012年、7-15頁)

【所属】学際情報学府特任助教

The Circumstances Leading up to a Literary Systems Study in the English-speaking World: B. Clarke's Constructivist View of Literature

Nami OHI*

Abstract

There have existed literary systems studies which are fundamentally based on constructivist systems theory and focus on, for example, social and experience-emerging nature of literature, from a perspective of communication. Literary systems studies have been being conducted by S. J. Schmidt, N. Werber, D. Schwanitz etc. mainly in Europe since the 1970s, and by B. Clarke, H. U. Gumbrecht, P. Sadowski and many other researchers mainly in the English-speaking world.

This study focuses on Clarke and aims to theoretically survey his literary studies before his full-scale application of systems theory to literary studies, for preparing to fully illuminate characteristics, themes and significance of literary systems studies in the English-speaking world. Because Clarke's studies this article treats seem to already have a part of systems theoretical ideas, this study compares them with precedent studies in Europe.

As a result, it was clarified that such themes as physical metamorphoses and allegories focused by Clarke have inseparable relations with central themes of constructivist systems theory per se. This not only immediately leads to ponder and illuminate significance of literature for ourselves and societies, but also opens a way through literary studies to bring out our experiencing ourselves and environment, in a too-complicated modern information society.

Emergence and *embodiment*, the main themes both in Clarke's literary studies and systems theory, are also central themes of *neocybernetics* which Clarke has recently proposed with a media researcher M. B. N. Hansen. It was necessary, we can argue, for a scholar of literature Clarke to advocate neocybernetics, who paid close attention both to major modes of allegories, including thermodynamic scientisms with the residue of a tendency to value order and biological scientisms (vitalism) with affirmative understanding of chaotic nature, and to these modes' realization history

*Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : B. Clarke, scientism, allegory, metamorphosis, literary systems studies, constructivist systems theory, neocybernetics

as literary texts, coming later to attach importance to the living forms of embodiment (or a body itself). Further, it can also be emphasized that such interdisciplinary literary studies as those Clarke and other related researchers conduct have been connected fundamentally and indivisibly with neocybernetic thoughts from the first.

In this respect, it is necessary to continuously discuss literary systems studies in the English-speaking world with text-base analyses, with illuminating close relations among literary studies, systems theory and neocybernetics.